

04

ボタン付け技術習得の現状と改善策について

Present Condition and Improvement Plan on the Sewing Skill of Fixing a Button

ファッション造形学科・講師
Department of Fashion Design・Lecturer

水嶋 丸美 Marumi MIZUSHIMA

1 はじめに

被服製作の実習における縫製技術の習得項目は、多々ある。縫製技術の中でも基本的な手縫い技術として「並縫い」「返し縫い」「まつり縫い」「ぐし縫い」「星止め」「ボタン付け」「ホック付け」などがある。

この技術の中には、大学入学までに学んでいる内容も多く含まれる。しかし、高等学校までの家庭科教育では、指導要領の改定や中学校での被服領域の選択制、高等学校における男女共修や平成15年高等学校入学生からの単位数削減により、学習内容が変化してきている。そのため、大学入学までの縫製技術における知識や技術の習熟度には個人差がみられる。

また、生活環境においても既製服にはファストファッション製品が増え、安価に被服が手に入るようになったため、家庭において縫製技術を必要とする機会も減っている。さらに、既製服の素材も織物からカットソーなどのニット(編物)製品が増えている。昨今、被服を補修することが容易でなくなったことも家庭において被服製作や補修をする機会が減少した原因の一つであると考えられる。

このような生活環境や学習環境において、大学入学までに縫製技術を学習してきた環境の異なる学生の基礎知識や技術に差が生じているのではないかと考え、その現状について調査を行い、大学入学までの縫製技術の習熟度と手縫いの技術指導の理解度をあげるための方法について検討した。

本研究では、縫製技術の中でも手縫いの基本技術であり、家庭における補修でも大学入学までに実践する機会があったと考えられる「ボタン付け」について調査を行った。

「ボタン」は、13世紀ごろから衣服に使われるようになったといわれている。それまでは紐が使われており、当時「ボタン」は男性の地位の象徴とされていた。婦人服に「ボタン」が使われ出したのは19世紀以降で、テーラード服を着用するようになってからといわれている。日本において「ボタン」が発達しはじめたのは明治維新以後であり、この頃から針と糸を使い一つずつ手でつけられていたが、ボタンの需要が多くなると機械が発明され、既製服のほとんどは機械でつけられるようになった。¹⁾

しかし、家庭においてまた専門技術を学ぶ上では、手作業による技術の修得は不可欠であり、高価なボタンの場合にはクリーニング時にはずすし、再び付け直す作業が必要とされる場合がある。普段着用している衣服でも「ボタン」がはずれることはあるため、取り付けが必要になる可能性がある。

そのため、手縫いの縫製技術として「ボタン付け」に着目し、習熟度の調査を行い、縫製技術の指導方法による習熟度の違いについて調査した。

2 方法

2.1 アンケート調査

調査対象は、大学入学後、「ボタン付け」を学んでいない学生41名を対象として集団質問紙調査を実施した。

調査項目は、大学入学までの「ボタン付け」の経験の有無、学習経験の有無、学習時期、指導者、ボタン付けが必要となった経験、ボタンがとれた場合の対応方法、中学校や高等学校での被服製作の実習内容、個人で製作した内容など14項目の調査を行った。

回答方法は、各項目で該当するものを選択させる方法で調査を行い、項目によっては選択肢以外の自由記述欄を提示した。大学入学までの被服製作の経験の中には、縫製技術に関する調査のためメイクも含むものとして調査を行った。

2.2 実技調査

実技調査では、調査対象者が大学入学後演習で製作するブラウス・シャツを想定し、木綿布2枚と接着芯をあわせた厚みに合わせ1mm厚のフェルト布を用いて実技調査を行った。

調査対象者にサイズ5cm×5cmのフェルト布6枚と20番手のポリエステルボタン付け糸(カード糸)1巻、2つ穴ボタン3個、4つ穴ボタン2個、足つきボタン1個、いずれも直径1.5cmを準備し配布した。その他、「ボタン付け」に必要なメリケン針(長針または短針)、糸切りばさみ等は個人所有のものを用いて実技調査を行った。

実技調査は、「ボタン付け」の縫製技術の習熟度を調査するため、4つの段階に分けて調査を行った。まず、大学入学までの習熟度を調査するため、【第1段階】として調査対象者に「ボタン付け」に関する説明や技術指導は実施せず配布した①2つ穴ボタン、②4つ穴ボタン、③足つきボタンの3つをフェルト布1枚につき、1つつ中央に付けさせた。

①～③の「ボタン」は、形状により分類される表穴ボタン(2つ穴・4つ穴など)、裏穴ボタン、足つきボタンから、調査対象者がブラウス製作のために用意したボタンの種類に合わせて選択した。また、表穴ボタンへの糸の通し方、ボタンの表裏の見分けに関しても採点基準とするため、表穴ボタンは2つ穴・4つ穴の両方を選択した。「ボタン」のサイズも同様にブラウス製作時にボタンの直径に合わせて身頃の前中心線から前端までの幅を1.5cmとして製図しているため、最大サイズである直径1.5cmサイズの「ボタン」を選択した。

次に、【第2段階】として調査対象者が教科書として利用している文化服装学院編『文化ファッション大系①改定版・服飾造形講座①服飾造形の基礎』から図1の通り2つ穴ボタン付けの方法3]を資料として提示し、資料を見ながら、【第1段階】と同様にフェルト布中央に2つ穴ボタンのボタン付けを行った。

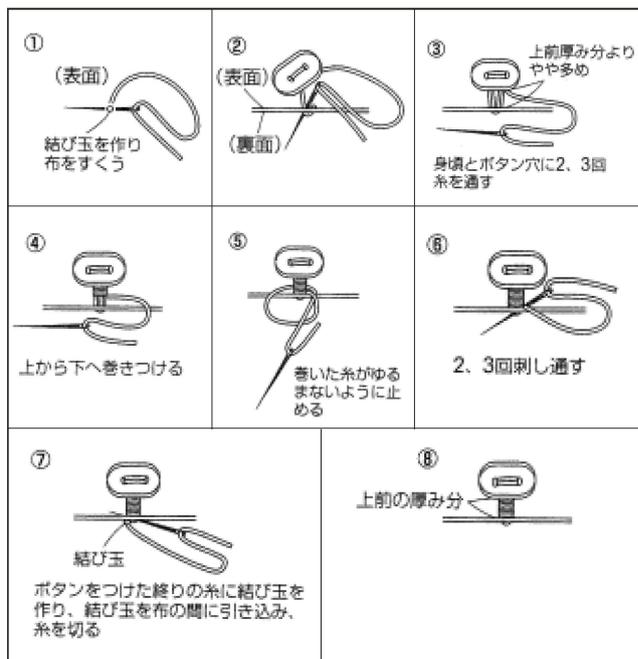


図1: 提示資料「2つ穴ボタンのつけ方」

【第3段階】では、調査対象者に配布したものと同じ4つ穴ボタンとフェルト布を使用して、調査対象者が確認できるように10～15名程度のグループに分けて示範を行い、示範終了後にボタン付けを実施した。

【第4段階】では、より示範が確実に目で確認できるように直径5cmのボタンと毛糸、毛糸用のとじ針を用いて示範を行った。調査対象者には2つ穴ボタンを用いてこれまで同様にフェルト中央にボタン付けを行った。

実技調査の評価は、「ボタン付け」の①糸足の有無、②土台布(フェルト布)のすくい位置と分量、③糸の始末(玉結び)、④その他(ボタンへの糸通しの回数・ボタンの表裏の区別など)の4つの項目に対して1～5点で評価した。

評価基準は、①糸足がつくられているか、つくられた糸足の長さが布の厚み(フェルト布1mm厚)を考慮して設定されているか、糸巻が糸足の長さに合わせてされているかを評価した。②土台布のすくい位置は、足下にバラつきがないか糸足の太さが考慮されているかを評価した。③糸の始末は、ボタンがはずれないよう玉結びされているか、見た目の美しさも考慮されているかを評価した。④その他では、表穴や足への糸通しが適度に行われているか、ボタンの表裏を確認してつけられているかなど総合的にきちんとつけられているかについて評価した。①～④を数値化してそれぞれの段階での習熟度を調査した。

3 結果および考察

3.1 アンケート調査結果

大学入学までに「ボタン付け」の経験があった調査対象者は、図2の通り97%であった。うち、小学校・中学校・高等学校の教育機関において教えてもらった経験のあった調査対象者は、図3の通り86%であり、多くの調査対象者に「ボタン付け」の学習経験があった。

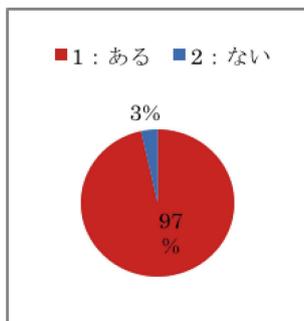


図2:「ボタン付け」の経験

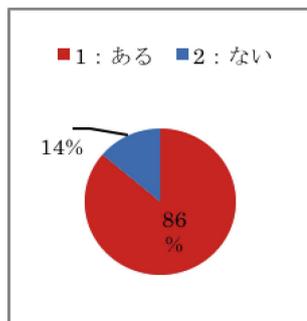


図3:「ボタン付け」の学習経験

「ボタン付け」の学習経験のある調査対象者が「ボタン付け」を学んだ時期を調査した結果、図4の通り「小学生」の 때가56%と多かった。次いで「中学校」32%、「高等学校」12%という結果であった。これは、別途調査した学習内容からも「中学校」や「高等学校」になるとミシンを使用した実習が多くなるためであり、ミシンを使用した実習に比べて危険も少なく、指導しやすい手縫いでの実習が「小学校」では取り入れやすかったためと考えられる。

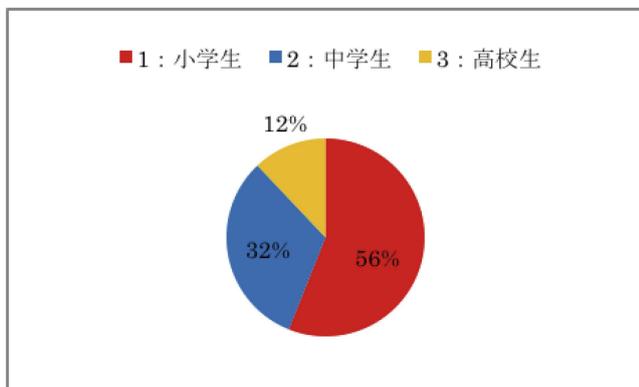


図4:「ボタン付け」を初めて学んだ時期

「ボタン付け」の方法を学んだ指導者に関する問いに対しては、図5の通り「家庭科の先生」が88%と最も多かったが、家族や家庭科以外の先生から学んだという回答もあった。「家族」と回答した調査対象者に聞き取り調査を行ったところ、自由記述に回答されていた「母」や「祖母」は被服系大学を卒業していたり、衣服製作を仕事としていたり指導者本人に専門的な学習経験があることがわかった。

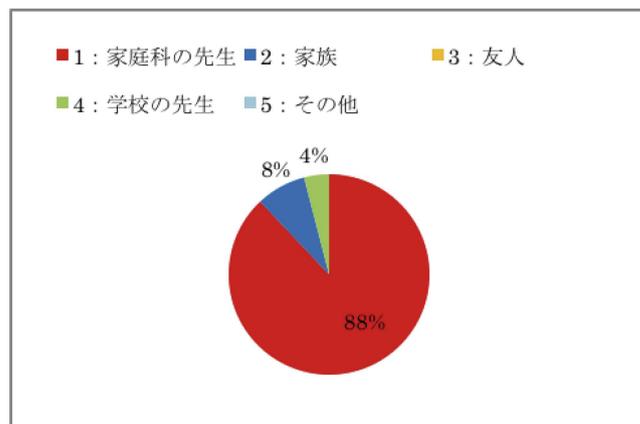


図5:「ボタン付け」を学んだ指導者

また、実生活においてボタンが取れた経験のある調査対象者は、図6の通り93%であり、そのうちボタンが取れた際に「自分でつけた」が70%、「家族につけてもらった」が30%であった。その他「友人・知人に付けてもらった」「専門店に出して付けてもらった」「処分した」等の選択肢を設定したが今回の調査において回答した調査対象者はいなかった。

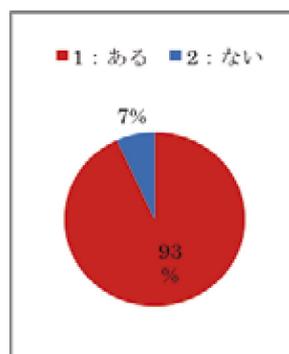


図6:「ボタン」が取れた経験

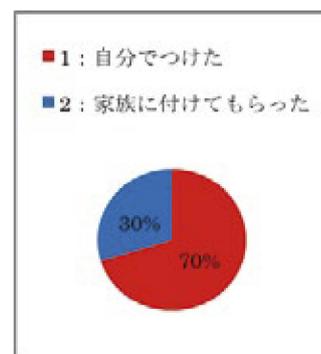


図7:「ボタン」が取れた場合の対応

図8と図9は、「中学校」と「高等学校」の家庭科教育における被服実習の有無を調査した結果である。「中学校」では調査対象者の64%が被服実習を行っており、「高等学校」では43%と「高等学校」の家庭科教育において被服実習が減少している結果となった。これは、男女共修や平成15年高等学校入学生からの単位数削減により、学習内容が変化してきたことが影響していると考えられる。

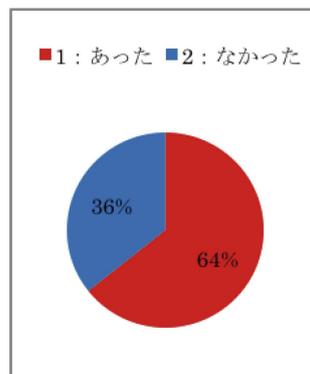


図8:中学校の被服実習の有無

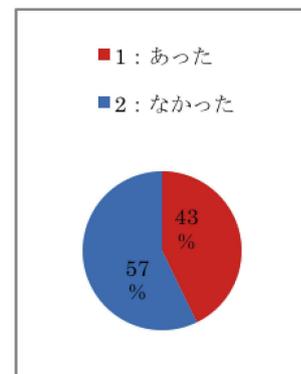


図9:高等学校の被服実習の有無

中学校や高等学校における家庭科教育での被服製作の内容を調査した結果、図10の通り中学校では「ティッシュカバー」や「マスク」、「マスコット」などの手芸品や小物が多く、続いて「バッグ・カバン」や「エプロン」が多かった。高等学校では、図11の通り中学校同様に手芸・小物類が多かったが、「ブラウス」や「ワンピース」や「甚平」「浴衣」などの和装の製作を行っている高等学校もあった。また、「ジャケット」や「コート」などの製作経験のある調査対象者もいた。これは、高等学校において被服系の専門課程での学修経験があったためである。

さらに、大学入学時まで個人的に製作した内容について調査を行ったところ、個人でも高度な縫製技術を必要とする内容に取り組んでいることが分かった。この結果には、中学校・高等学校において学習経験のない調査対象者も含まれており、今回の調査対象者が被服系大学に進学した学生であり、専門的に被服製作を学習する意欲の高い学生が多かったことが影響していると考えられる。

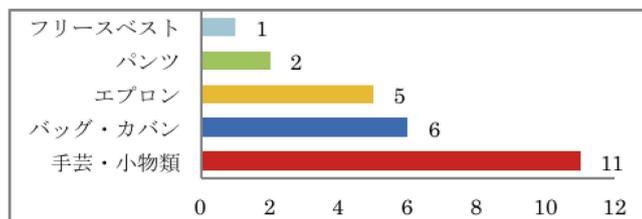


図10: 中学校の家庭科教育における被服実習の内容

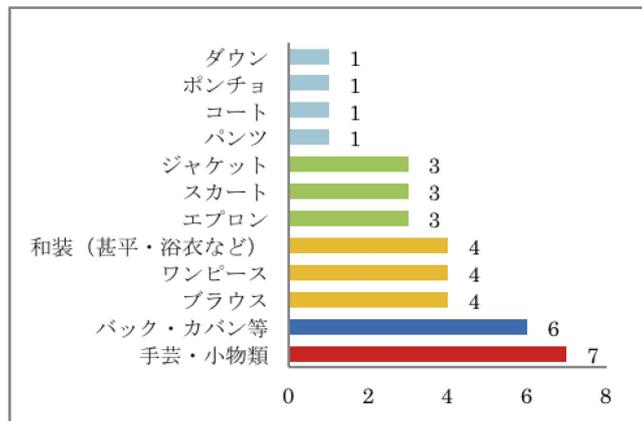


図11: 高等学校の家庭科教育における被服実習の内容

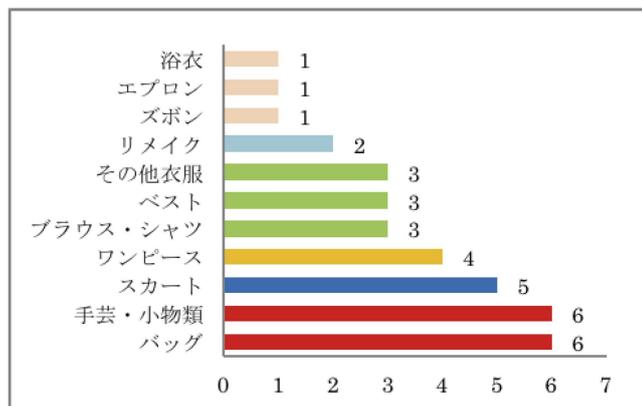


図12: 個人で取り組んだ製作物の内容

3.2 実技調査結果

「ボタン付け」の実技調査を行った結果、説明をせずに行った「ボタン付け」評価の合計点数の平均は、20点中6.4点であった。表1の通り、「ボタン付け」の経験がある調査対象者と経験のない調査対象者の評価平均点を比較した結果、平均点に2倍の差がみられた。また、説明せずに「ボタン付け」を行った結果、図13の様に糸足を付けていないものが全体の17%あり、ボタンを通した際の布の厚みを考慮して糸足を付けているものは、ほとんどなかった。さらに、土台布に針を通す位置にバラつきが大きく、図14の様に糸足が太くなっているものが多かった。

また、評価基準としていた玉結びに関しても図15の様に意識せずに玉結びしているものも多く、複数玉結びされているまたは裏面に集中しているものや、玉結びが絡まり大きくなっているもの、布から離れた位置で玉結びされているもの、中には玉結びをしていないものや糸の始末が不十分で糸端が残っているものがあった。

表1: 説明なしで行った場合の「ボタン付け」経験の有無による評価平均値(20点中)

| 「ボタン付け」経験の有無 | 評価平均点 |
|---------------|-------|
| 「ボタン付け」の経験【有】 | 6.6点 |
| 「ボタン付け」の経験【無】 | 3.3点 |



図13: 糸足のない「ボタン付け」一例



図14: 糸足が短く太い「ボタン付け」一例



表2: 説明なしで行った場合の「ボタン付け」学習経験の有無による評価平均値(20点中)

表2: 説明なしで行った場合の「ボタン付け」学習経験の有無による評価平均値(20点中)

| 「ボタン付け」の学習経験の有無 | 評価平均点 |
|-----------------|-------|
| 「ボタン付け」の学習経験【有】 | 6.8点 |
| 「ボタン付け」の学習経験【無】 | 5.1点 |

「ボタン付け」の学習経験の有無による習熟度を比較した結果、表2の通り学習経験のある調査対象者の評価平均点が6.8点であり、学習経験のない場合は5.1点と学習経験がある方が、評価平均点が高かった。

さらに、①「ボタン付け」の方法を説明した資料(図1)を提示して行ったボタン付け、②実物大のボタンを使用しての示範して行ったボタン付け、③直径5cmサイズのボタンを使用して示範を行った場合のボタン付けで評価平均点の比較を行った結果、

表3の通り①資料(図1)を見ながらボタン付けを行った際の評価平均点は12.9点、②実物大のボタンを使用して示範を行った際のボタン付けの評価平均点は16.2点、③直径5cmのボタンを使用して示範を行った際のボタン付けの評価平均点は17.1点となった。資料提示も示範も行わずに大学入学までの知識と技術で付けた結果を示した表1や表2の「ボタン付け」の評価平均点と比較するといずれも大きな差がみられた。また、①資料提示のみと比較しても、実際に示範した場合の方がさらに評価平均点が高く、②実物大のボタンと③直径5cmのボタンを使用した場合と比較しても評価平均点に0.9点とわずかな差ではあるが③直径5cmのボタンを使用して示範した場合の方が評価平均点が高い結果となった。評価対象者が見やすく理解しやすい環境づくりと示範を行う事で習熟度が高くなる結果となった。

表3:「ボタン付け」の示範方法の違いによる評価平均値(20点中)

| 「ボタン付け」の示範方法 | 評価平均点 |
|----------------|-------|
| ①「ボタン付け」資料の提示 | 12.9点 |
| ②実物大ボタンによる示範 | 16.2点 |
| ③直径5cmボタンによる示範 | 17.2点 |

特に、評価基準としていた糸足は、図16の様に同一人物が行った「ボタン付け」を比較しても、資料提示や示範後に用途を理解し、布の厚みに合わせ長さや太さ考慮してつけられるようになっている。さらに、資料提示や示範をすることでボタンの取付け位置が一点に集中するようになった。また、図17の様に玉結びや糸始末を意識して行うようになった結果、資料提示や示範前の図15と比較すると出来上がりに大きな差がみられた。提示された資料を理解し、「ボタン付け」の示範を見ることによってさらに習熟度が上がり、出来上がりに対する意識が変化したことによるものであると考える。



図16: 資料提示および示範後の「ボタン付け」糸足の一例



図17: 資料提示および示範後の「ボタン付け」玉結びの一例

さらに、直径5cmのボタンで示範を行った後の「ボタン付け」は、図18の様に糸足を作る際の糸巻きの習熟度があり、糸足が安定しているものが多かった。

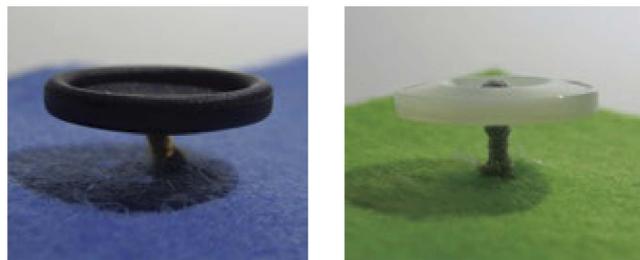


図18: 示範後の「ボタン付け」一例

縫製技術の理解度や習熟度を高めるためには、示範を行う事は重要であり、今回は、10~15名程度で示範を行ったが、実際の授業では、少人数での示範が難しい場合もある。そのため、今回の「ボタン付け」の示範では直径5cmのボタンを使用して示範を行った結果、実物大のボタンで示範を行うよりも正確に「ボタン付け」の技術を習得していた。

表4: 被服製作経験の有無による「ボタン付け」の評価平均値(20点中)

| 被服製作経験の有無 | 説明無 | 資料 | 実物大 | 5cm大 |
|-----------|------|-------|-------|-------|
| 被服製作経験【有】 | 6.2点 | 13.2点 | 16.2点 | 17.7点 |
| 被服製作経験【無】 | 7.0点 | 12.0点 | 16.2点 | 15.2点 |

また、今回大学入学までの被服製作経験の有無による「ボタン付け」の評価点を比較した結果、表4のような結果となった。

説明がない状態での「ボタン付け」では、被服製作の経験が無い方が評価点の平均が高く、経験者の評価平均点が低かった。しかし、経験者は資料提示および示範後評価平均点が高くなる結果となった。この結果に関しては、評価点数やその他の要因も含めてさらに調査を行い縫製技術の定着率を高めるための方法を今後検討していきたい。

4 まとめ

今回、大学入学までの教育課程において、「ボタン付け」の縫製技術が定着しているのか実態を調査し、被服系大学へ進学して専門知識や技術を学ぶ学生の習熟度を高めるための方法を検討した。主な結果は、以下の通りである。

- 1) 大学入学までに「ボタン付け」の縫製技術を学んだ経験のある学生が多く、さらに実生活でも学んだ技術を役立て補修を行っていた。
- 2) 「ボタン付け」などの手縫いの縫製技術は、小学校で学んでいる学生が多く、習熟度や技術の定着の現状に影響を与えていた。また、大学入学までに取り組んだ製作物の内容からも高等教

育になるほど手縫いの縫製技術を学ぶ機会が少なくなっている結果となった。

- 3) 大学入学までに「ボタン付け」を学んだ経験のある学生も縫製技術は定着していない結果となった。特に、糸足の長さが不足していたり、土台布に針を通す幅が大きくバラつきがあるため糸足が太くなっていたり、玉結びや糸始末がきちんとできていないものが多かった。
- 4) 中学校・高等学校での被服製作実習や大学入学までの個人的な被服製作の経験と「ボタン付け」の縫製技術の習熟度および定着に関連はない結果となった。
- 5) 「ボタン付け」の実技調査を行った結果、資料提示のみよりも示範を行う事で習熟度が上がった。さらに、示範をより見やすくすることで、より習熟度が上がる結果となった。

今回「ボタン付け」に関して調査した結果、小学生や中学生で学んでいた学生が多かったため、学んでから期間があいていたことも習熟度が低くなった要因であると考えられる。学んだ縫製技術を定着させることが重要であり、特に専門教育を行う大学教育においては、習熟度とあわせて定着率をあげることが重要となる。今後、追跡調査を行う事で縫製技術の定着率も調査していきたい。

また、今回の調査において、表4の通り学習経験者が資料提示後に評価平均点が上がっている結果から考察すると、資料を見ることが学習経験の記憶を思い出し、結果につながったのではないかと推察されるため、縫製技術を定着させることが重要ではあるが、資料を確認する習慣や示範を必要な時に見ることができるようにPCやスマートフォンを利用したコンテンツの製作にも今後取り組んでいきたいと考える。

示範を繰り返し視聴できるコンテンツの製作は、授業内で全ての実習課題を行う事が出来なかった場合や、個人製作などの場合でも正確な縫製技術を学習することができる。このように今後ICTを活用し、縫製技術を定着させていくことは重要である。

一方、授業として専門とする分野の知識や縫製技術の習熟と定着率の向上のためには、今回の結果をふまえて授業履修者が理解しやすい示範方法の検討も行っていきたい。

謝辞

本研究の遂行に関し、ご協力いただいた名古屋学芸大学メディア造形学部ファッション造形学科の学生の皆さんに深甚の謝意を表します。

参考文献

- [1] 田中千代、『新・田中千代服飾辞典』、同文書院、1998.
- [2] 阿部幸子・鷹司繪子・田村照子・中島利誠・丹羽雅子・藤原康晴・山名信子・弓削修編、『被服学辞典』、朝倉書店、1997.
- [3] 文化服装学院編、『文化ファッション大系 改訂版・服飾造形講座① 服飾造形の基礎』、文化出版局、2009.
- [4] 中屋典子・三吉満智子監修、『文化女子大学講座 服装造形学 技術編Ⅰ』、文化出版局、2009.
- [5] 布施谷節子・高部啓子、『家政系女子短大生における手縫いの技能の実態：被服製作の知識と過去の経験との関連性』、日本家庭科教育学会誌 第43巻第4号 pp.273-278、2001.